「主の祈り」のことば — ギリシア語原典、ウルガタ訳、英語聖書との比較 —

土 居 琢 磨

はじめに

本稿は、新約聖書の「主の祈り」における動詞を中心に、ギリシア語原典、ウルガタ訳、及び、21種類の英語聖書を古期(OE)、中期(ME)、初期近代(EModE)、現代英語(PE)に亙って比較検討し、それと関連する事項は最少限度に止めて考察することを目的としている。「主の祈り」はマタイ (6:9－13)とルカ (11:2－4)両福音書にみられるが、ここではマタイを中心とし、必要に応じてルカにも触れる。使用するギリシア語原典、ウルガタ訳、古期英語の聖書の各版は次の通り。

Novum Testamentum Graece (Nestle-Aland, 26 Aufl. Stuttgart 1979)
Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem (2nd ed. Stuttgart 1975)
J.W.Bright (ed.): *The Gospel of Saint Matthew in West Saxon* (AMS, New York 1904)
——— : *The Gospel of Saint Luke in West Saxon* (AMS, New York 1906)

この古期英語の福音書は、The Library of Corpus Christi College, Cambridge の MS 140の写本であり、1000年頃とされている。

中期英語のウイクリフとその後の英訳の新約聖書については、書名と年代および本稿で用いる略語のみを記しておく。

Wyclif (Wyc 1380), Tyndale (Tnd 1535), Great Bible (Grt 1539), Geneva Bible (Gnv 1560), Bishops' Bible (Bsp 1568), Rheims-Douay (Rms 1582), Authorized Version (AV 1611), American Standard Version (ASV 1901), Revised Standard Version (RSV 1946), Amplified Bible (Amp 1958),

Phillips: The New Testament in Modern English(Phs 1958), New English Bible (NEB 1961), Jerusalem Bible (Jsm 1966), Good News Bible: Today's English Version (TEV 1966), Living Bible (LB 1971), Translator's New Testament (Trn 1973), New International Version (NIV 1973), New King James Bible (NKJB 1979), Revised English Bible (REB 1989), New Revised Standard Version (NRSV 1989)

旧約・新約聖書における書名の略語と日本語訳は、いずれも『聖書　新共同訳』(日本聖書協会　1992) に拠る。ギリシア語原典に対するウルガタ訳、OE, ME, EModE, PEの代表的聖書の比較表を除き、論述の部分でのギリシア語は、ラテン文字による字訳を行い、その対照表は、*Oxford English Reference Dictionary* (p.1755 Oxford 1995)に従う。

1　ヘレニズムとギリシア語およびラテン語

西洋文化の底流の一つとしてキリスト教思想が息づきなら時代と共に移りゆく社会を、その歴史の中に窺い知ることができる。その拠り所となっているのは先ず聖書に見出される。信仰の立場に立つかどうかは別として、聖書に対するアプローチは多様である。聖書はどのようなことが、どのような言い回しで書かれているのか、言語学的特徴の面からみるのも、その捉え方の一つである。

新約聖書はギリシア語で書かれている。このギリシア語はイエスが日常、人々に語りかけていた言語ではない。イエスの言語はアラム語と言われるが、ヘブライ語も併用したとする説がある。(1) いずれにしても、アラム語が使用されていたことは、「大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた」(マコ 12:37)と記されている中で、その言葉として伝えられるものに、「エッファタ」(マコ 7:34)、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」(マコ 15:34)等がある。

元来、アラム語は紀元前8世紀頃から、漸次、パレスチナに広がり、前4世紀には既にヘブライ語に代って日常語になっていた。言語学的にみれば、アラム語とヘブライ語は共にセム語系の言語である。イエス時代には、そのアラム語がいくつかの方言に分れ、その一つが、エルサレムを中心とするユダヤのユダヤ方言として言語学で分類されているものである。(2) 一方、新約

聖書のギリシア語は、コイネー・ギリシア語と呼ばれることがあるが、コイネーは、「普通の、共通の」を意味し、ヘレニズム文化以後、エジプト、小アジア、メソポタミアに亙る広大な地域で用いられた共通語としてのギリシア語である。

曾て主権的存在としてのポリスでそれぞれ孤立していたギリシア語は、アレクサンドロス大王およびその後継者によってもたらされたいわばヘレニズム的世界国家の中で、特に日常語のレベルで変貌を遂げ、ヘレニズム文化の世界で、広く伝達メディアとしての役割を担うに至ったのが、この「共通ギリシア語（Koinē Greek)」であり、これを用いて新約聖書が書かれたのは、自然の推移である。

コイネー・ギリシア語は、古典ギリシア語に較べて文法的に簡潔になり、その特徴を新約聖書の中に多く見出すことができるので、それまでの古典ギリシア語と対蹠的に「聖書ギリシア語」として扱われる一因にもなっている。上記のような言語学的、地理的背景の中で書かれた新約聖書に、ユダヤ人のヘブライ語やアラム語、つまり、セミティズムの影響があると考えられるのは当然である。しかし、そこで使用されているギリシア語を新約聖書だけに見出される言語学的特徴として捉えるよりも、ギリシア語の古典時代から現代に至る変遷の中の一時期の特徴としてみる方が妥当である。

ユダヤ教との対峙の中で、イエスの死後、怯懦ではあり得なかった弟子達によってキリスト教がユダヤの土地から各地に広まっていき、教会の信仰が一つの勢力として確立し、神学の基礎もおかれることになった原始キリスト教時代において、教会の重要な役割は宣教(kērugma)、つまり、福音を伝えることであった。見方をかえれば、多くの伝導者達が係わる宣教を前提とする福音であるかぎり、そこでは、意識の有無にかかわらず、ことば遣いに多様な技巧を伴うのは必定であり、それは、いわゆるレトリックと無縁ではあり得ないことになる。

よく知られている通り、ギリシア語のrhētōrからの派生語rhētorikēに由来し、「雄弁術」を意味するレトリックは、紀元前5世紀にシラクーザのコラックスに始まるとされ、アテネのソフィスト達を経て、前4世紀にアリストテレスで体系化された。その後、ローマ時代のキケロやセネカ達によって発展し、中世では、教養七学科(The Seven Liberal Arts)の一つとして、論理学、文法等と同じく必修科目となり、現代にもいろいろ形を変えて、例え

ば、広義の文体論、意味論等との領域が必ずしも明確でない面が生じている。

このようにヘレニズム・ローマ時代におけるレトリックの役割は無視できない。なお、一世紀のパレスチナでの使用言語は、アラム語とヘブライ語だけでなく、ローマ支配の公用語としてのラテン語とギリシア語が入ってきた。実際、これらの言語を使用する人々がイエスの周辺にいたことは、イエスの死後の十字架の上に掛けられた罪状書きは、「ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた」と記すヨハネ19:20 からみても明らかである。これらの点を措定すると、イエス時代、更にその2・30年後からと思われる福音書が書かれた時代には、既にギリシア語、ラテン語の浸透と共に、レトリックの技が当時の言い回しに自ずと反映されていると考えられる。

福音書の執筆は、マルコ福音書とQ資料（ドイツ語で資料、源泉を意味するQuelleの頭文字）と呼ばれるイエスの語録の基礎資料に負うとする二資料説の検討はひとまず措くとして、数々の比喩的表現の中にレトリックの片鱗を垣間見ることができる。「主の祈り」として知られるマタイ6:9－13 は、「天におられるわたしたちの父よ」として、「天」と「父」いずれも、比喩的、象徴的表現で始まる。この「主の祈り」を、これと対応関係にあるルカ11:2－4 も必要に応じて参照し、ギリシア語原典と、その後のウルガタ訳および古期英語から現代英語に亙る21種類の英訳聖書の中に、どのような言語学的関連性が見出されるのかについて、動詞を中心とし、それに関連する二三の問題点についても考察を進めていく。なお、頌栄部（Doxology）は検討の対象から割愛する。

2　「主の祈り」とことば

「主の祈り」を、ギリシア語原典で示し、ウルガタ訳のほかに、英語訳では、古期英語をウェスト・サクソン福音書、中期英語をWyc、初期近代英語をAV、現代英語をNRSVとして、それぞれを選んで併記する。なお、ギリシア語原典だけは、後述の都合上、マタイとルカ両福音書を併記する。マタイの「主の祈り」が７つの願いから構成されていることをNRSVで示し、これに対応するルカ11:2－4 と、どのような異同が認められるかについても、比較対照表として示しておく。

[ギリシア語原典]

《マタイ》

9 Πάτερ ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς·
ἁγιασθήτω τὸ ὄνομά σου·
10 ἐλθέτω ἡ βασιλεία σου·
γενηθήτω τὸ θέλημά σου,
ὡς ἐν οὐρανῷ καὶ ἐπὶ γῆς·
11 τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον δὸς ἡμῖν σήμερον·
12 καὶ ἄφες ἡμῖν τὰ ὀφειλήματα ἡμῶν,
ὡς καὶ ἡμεῖς ἀφήκαμεν τοῖς ὀφειλέταις ἡμῶν·
13 καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν,
ἀλλὰ ῥῦσαι ἡμᾶς ἀπὸ τοῦ πονηροῦ.

《ルカ》

2 Πάτερ , ἁγιασθήτω τὸ ὄνομά σου·
ἐλθέτω ἡ βασιλεία σου·
3 τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον δίδου ἡμῖν τὸ καθ' ἡμέραν·
4 καὶ ἄφες ἡμῖν τὰς ἁμαρτίας ἡμῶν,
καὶ γὰρ αὐτοὶ ἀφίομεν παντὶ ὀφείλοντι ἡμῖν·
καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν .

[ウルガタ訳]

9 Pater noster qui in caelis es／ sanctificetur nomen tuum
10 veniat regnum tuum／ fiat voluntas tua sicut in caelo et in terra.
11 panem nostrum supersubstantialem da nobis hodie
12 et dimitte nobis debita nostra sicut et nos dimisimus debitoribus nostris
13 et ne inducas nos in temptationem sed libera nos a malo.

[ウェスト・サクソン福音書]

9 Fæder ure þu þe eart on heofonum, Si þin nama gehalgod.
10 Tobecume þin rice. Gewurþe ðin willa on eorðan swa swa on heofonum.
11 Urne gedæghwamlican hlaf syle us to dæg.
12 And forgyf us urne gyltas, swa swa we forgyfað urum gyltendum.

13 And ne gelæd þu us on costnunge, ac alys us of yfele.

[Wyclif]

9 Oure fadir that art in heuenes halowid be thi name,
10 thi kyngdom come to, be thi wille don in erthe as in heuene,
11 ȝeue to us this day oure breed ouir other substaunce,
12 forȝeue to vs oure dettis, as we forȝeuen to oure dettouris,
13 lede us not in to temptacioun: but delyuer us from yuel.

[AV]

9 Our Father which art in heaven, Hallowed be thy name.
10 Thy kingdom come. Thy will be done in earth, as it is in heaven.
11 Give us this day our daily bread.
12 And forgive us our debts, as we forgive our debtors.
13 And lead us not into temptation, but deliver us from evil.

[NRSV]

《マタイ》

Our Father in heaven,
(1) hallowed be your name.
(2) Your kingdom come.
(3) Your will be done, on earth as it is in heaven.
(4) Give us this day our daily bread.
(5) And forgive us our debts, as we also have forgiven our debtors.
(6) And do not bring us to the time of trial,
(7) but rescue us from the evil one.

《ルカ》

Father,
(1) hallowed be your name.
(2) Your kingdom come.
(4) Give us each day our daily bread.
(5) And forgive us our sins, for we ourselves forgive everyone indebted to us.
(6) And do not bring us to the time of trial.

上の表が示す通り、マタイの7つの願いで、(2)と(3)、及び(6)と(7)は、それぞれ緊密なparallelismが認められる。この類似する内容の反復を避けてルカでは、マタイ相当部分の(2)と(6)だけで合計5つの願いとなっている。[3] 両福音書は(1)に収斂される願いであり、それぞれ敷衍のしかたに差異があるといえる。

因に、5と7は古くから神聖、神秘的な数と考えられていた。[4] 7が完全数であることは、「創世記」には安息日を含む7日間で完成した天地創造の記述もある。また、「ヨシュア記」のエリコの戦いの場面で、6章1～16節だけで7が10回繰り返されている。7の二分の一は反対の意味をもち、「ヨハネの黙示録」(13:5)に、神を冒涜する獣が人々に猛威をふるった期間は42か月、すはわち、3年半とある。福音書でも同じく、マタイだけでも11回の使用例(15:34ほか)をみる。中世にも既述の教養七学科がその一例であり、また、ルネサンス期のシェイクスピアは『お気に召すままに』で、ジェイクィーズの口を借りて人生を7つの時代(seven ages)に分けている(II,ii,139－166)。5もまた、聖書でよく用いられる数として挙げてよい。旧約聖書では屡々、エジプトに関する記述の中に見られ(例、創43:34、45:22)、新約聖書でも例えば、マタイで10回の使用例(14:17ほか)がある。

新約聖書におけるイエスの宣教の中には、究極的なものが、既に現れたか間近であるかの差はあっても、絶えず、終末論的響きを聞きとることができる(例、マタ 4:17、12:28、マコ 13:29、ルカ 11:20等)。「主の祈り」は、すべてのものに対する神の導きがあるものとする終末論的期待の示唆がみられ、当時の終末論的雰囲気の中に生きていた共同体の祈りのあり方でもあったとされる。[5] ここでの最初の3つの願いは、詰まるところ、同工異曲の表現とみてよい。*Oxford English Dictionary* (*OED*) のNAME に関する説明からも判るとおり、神の御名は、とりもなおさず、神それ自身であり、すべての被造物によって《聖なるものとしてその神が崇められる》ような世界になること、これが主題であって、《御国が来ること》、《御心が行われること》への願いはその変奏である。

言語形式上も、ギリシア語原典でみると、最初の3つの願いが3人称単数、アオリスト、命令法による同じ構文で繰り返され、内容と平行するこの種の技巧は，parallelismの一種と見做され、この技巧の中に、リズムの展開が繰り広げられていく。このような parallelism はセム語系の特徴、つまり、

Semitism の一つと考えられている。[6]

第1から第3までの願いは「天」に焦点がおかれているが、第3の後半で「天におけるように地の上にも」を添えることによって、天と地の橋渡しが生じ、地上における人間の具体的な日常的あり方を対象とする願いが、第4から第7の中で神に向けられている。被造物としての人間が行為の対象として明示される第4から第7までのギリシア語4種類の動詞は、2人称能動態の命令法である。

7つの願いの構成について、「御心」が天では既に行われているが、地上では未だ実現されていない。「御国」が来れば、それが実現されることになる。従って、《御国が来ること》が「主の祈り」の核心である、とする考え方も一方では成り立つことはたしかである。[7] しかし、ここは《御国が来ること》、《御心が地上にも行われること》、これらの願いが叶えられるとき、その瞬時こそ、神の名が聖なるものとして崇められる世の中になっている証しのときにほかならない。7つの願いは並列的に続くのではなく、階層をなす構成とみるべきであり、しかも、すべては第1の願いに収斂される。つまり、第2から第7までの願いは、第1の願いを内容面から敷衍し、また、それに至るための具体的な方法を明示するためのものである。換言すれば、冒頭におかれた第1の願いは、残りの6つの願いすべてを包含する中核として考えてよい。

3　「主の祈り」からみたギリシア語原典とウルガタ訳

ここで、マタイの「主の祈り」における7つの願いを表すギリシア語動詞について、語形上の特徴をみておく。

(1) hagiasthētō: hagiazō (‘to treat as holy’) のアオリスト、命令法、受動態、3人称単数

(2) elthetō: erkhomai (‘to come’) のアオ、命令、3単

(3) genēthētō: ginomai のアオ、命令、3単

これについて、J.H.Thayer (trans.): *A Greek-English Lexicon of the New Testament* (Edinburgh 1961)によると、命令、決定、目的、要求等を表すとき、‘to be made, done, finished’ の意味となる。上記の通り、ここではアオリストであり、いわゆる受動態としての“Deponent passive”の一種で

ある。元来、ギリシア語の中間態（Middle voice）は、歴史的に受動態より古いが、漸次、後者が広く用いられるようになった。Robertson & Davis (1982) は、この動詞をそれ以前のギリシア語と較べて、新しい受動態と見做している。[8] 因に、ギリシア語の態(Voice)は、能動態、中間態、受動態の3種に区分され、ただ、動詞によっては、能動形が欠如していて、中間、または、受動の形式であっても、意味上は、能動的意味をもつ動詞がある。これはDeponent verbと呼ばれ、その用法は、受動的、能動的のほかに、自動詞、また、他動詞としての用法等、多岐に亙り、[9] それについての詳述は本稿で割愛する。

(4) dos: didōmi (‘to give’) のアオ、命令、2単

このアオリスト、命令形については、マタイに対応するルカ11:3と対照的である。元来、アオリストは、ある出来事を記述的ないし瞬時的なものとして捉えて表現する形であり、動作の継続、完了、及び、その結果等という特定の意味表示を目的としない限り、ギリシア語では普通に用いられる語形である。

マタイ6:11では、「今日」(‘sēmeron’)と特定の時を示す語があるので、瞬時的なアオリスト(‘dos’)が用いられ、他方、ルカ11:3では、「毎日」(‘to kath hēmeran’)と反復、習慣を表す語句を伴うので、非瞬時的な現在時制の命令形(‘didou’)となっている。このルカにおける現在、命令形の1例を除いて、両福音書の「主の祈り」は、アオリスト形で表現されている。アオリストでの祈りは、発話時からみた相対的な時間関係を表す時制形式というよりも、寧ろ、発話時における緊急性表現、また、(神への)切実な祈り、いわば、“instant prayer” に適した形ともいえる。[10] なお、この第4の願い以降の動詞は2人称単数形となる。

(5) aphes: aphiēmi (‘to forgive’) のアオ、命令、2単

(6) eisenegkēs: eispherō (‘to bring into’) のアオ、接続法、2単

ここでは、mē との組合わせによって禁止を表す。元来、ギリシア語で禁止を表す形は、[(否定語) mē+接続法] であったが、漸次、命令法がその代わりをするようになった。しかし、後者にすべてをとって代わられることはなかった。特に、2人称では接続法が依然として使用された。直説法での否定は ou を、そのほかの法および分詞では mē を用いることを原則とした。[11] Moulton によると、[12] 共観福音書の中で mē を伴う現在、命令法に対するア

オリスト、接続法の比率は、マタイで12対29、マルコで8対9、ルカで27対19となっていて、マタイとルカでは対照的な使用頻度を示している。アオリスト・接続法は瞬時相(momentary or punctiliar)ないし起動相(ingressive)の特徴をもち、現在・命令法は継続相(durative or linear) の特徴を有している。前者は、動作が既に進行中かどうか、また、その頻度と関係なく、動作がなされようとしていることを未然に防ぎ、従って、その動作の開始が未だなされていない場合が最も多い。後者は、(反復的行為も含む)一般的行為の禁止、または、既に継続中の行為を禁止するものである。Robertson は、前者をPunctiliar aorist subjunctive、後者をDurative present imperative として、それぞれを特徴づけている。[13] なお、この区別が新約聖書で細かく遵守されているので、一方、それに対応する微妙な仕組が英語には欠けていることから、十分な注意を払う必要があると、Nunn は述べている。[14]

この第6の願いを除く動詞がすべて命令法である点に関連していえば、命令法は、現在形が古くは用いられていたが、新しくアオリスト形がこれに加わった。このアオリスト形、即ち、(Robertsonの説明を借りると)「二番生え」('after-growth')(同上 p.852)は、古いギリシア語と較べると、新約聖書では頻度が高くなっている。既述の通り、アオリストの命令形が'instant prayer' としての特徴を帯びるのは、上記の否定文の場合と同じく、瞬時相ないし起動相としての特性に起因すると考えられる。

(7) rhusai: rhuomai ('to rescue') のアオ、命令、2単、中間態

以上の通り、7種の動詞に共通する点は、すべてがアオリストであり'instant prayer' の特徴を窺うことができる。しかも、第6の願いにおけるmē と接続法の併用による禁止型を除いて他の6種は命令法である。第1から第3までの願いは3人称単数形で、第4から第7までは2人称単数形で表現されている。前述の通り、人間が直接に係わるかどうかによってその差異が生じていると考えられる。

ここで上記7種の動詞形と比較のため前掲ウルガタ訳についてみておく。下記の通り、第4の願い以降の動詞は、法(Mood) の面で、ギリシア語原典と同じ対応を示している。

第1から第3までの願いの動詞、つまり、sanctificetur [<sanctifico ('to make holy')の3単、所相 (=受動)]、veniat [<venio ('to come') の3単]、fiat [<fio ('to be made/done') の3単] は、いずれも接続法で

あり、いわゆるラテン語文法でいうOptative subjunctiveに属する。第4から第7までの動詞のうち、da [<do ('to give')]、dimitte[<dimitto ('to send forth')]、libera[<libero ('to deliver')] は、すべて2人称単数形、命令法である。ただ、第6のinducas[<induco ('to induce')] は、2人称単数形、現在、接続法であり、neを伴って意味上は否定の命令《禁止》、いわゆるProhibitive subjunctiveとなり、ギリシア語原典と法の面で平行する。勿論、ラテン語では命令法にneを伴って禁止を表す用法があるが、前者に較べると新しい形とされる。

ギリシア語原典における第1の願いから第3までの動詞は、命令法であるが3人称である点、第4以下では、第6を除いていずれも2人称単数形、命令法であり、ウルガタ訳と多くの点で共通している。両言語における動詞用法上の類似性に起因すると考えるだけでなく、ウルガタ訳に対するギリシア語原典そのもの影響も等閑視することはできないように思われる。

4 「主の祈り」と古期・中期・初期近代・現代英語の聖書

ギリシア語原典、ウルガタ訳に対応する英訳聖書として、前掲の通り時代順に、古期(OE)・中期(ME)・初期近代(EModE)・現代英語(PE)の各版について考察し、必要に応じて他の17種の英語聖書についても比較検討する。

OEでは最初の3つの願いに使用されているsi, Tobecume, Gewurþe は、それぞれ、beon ('to be'), tobecuman ('to come'), gewurþan ('to become') の接続法、単数形であり。第4の願い以降のsyle, forgyf, gelæd, alys は、各々、syllan ('to give'), forgyfan('to forgive'), gelædan ('to lead'), alysan ('to deliver') の命令法、単数形である。第6のgelædが命令法であることを除くと、残り6種の法はウルガタ訳と一致し、語の使用面のみならず、統語論上も後者の影響の跡が窺われる。

OEにおけるこれらの動詞の法は、そのまま前掲MEのWyclifにも見出される。但し、OEにおける動詞の屈折組織がMEでは衰退し始め、直説法と接続法の屈折語尾が互いに曖昧になってきたという英語史上の一般的特徴からみて、語それ自体の形からは即断しかねる場合もあるが、このWycにおけるbe, come, be (don) は、統語上、接続法とみて差し支えない。他の4

種の動詞はいずれも命令法である。これは、AV, RSV, NRSV についても全く同じことがいえる。ただ、第6の願いで、AV, RSV までは助動詞doを用いず、本動詞の後にnotを置く古い時代の否定の単純形が残っているが、NRSV ではdo を伴う点で、他と較べてPEの特徴が映し出されている。

ついでに、この第13節で、Wyc－AV－RSV は'temptation' となっているが、NRSV では 'the time of trial' となっている。対応するギリシア語のpeirasmonは peirasmos の単数、対格である。その動詞peirazō ('to try') について、Thayer (1961) は、宗教的文脈での意味として、'to inflict evils upon one in order to prove his character and the steadfastness of his faith' としている。名詞 peirasmos について同じくThayer [同上 a & b] に、(a) 試すこと、(b)(特に)「誠実、節操等についての試練(試し)」として、1ペト4:12 から例を挙げ、更に、「(本人の欲求、また、外部の状況のせいは問わず) 罪への誘惑」として、ルカ8:13 を例示している。その上、「主の祈り」マタ6:13 とルカ11:4 では「つい誘惑に負けて罪を犯し、また、背教へと向かうような事態ないし精神状態」を指すとし、この用法は、マタ26:41、マコ14:38 にもみられると述べられている。「主の祈り」でのマタイ、ルカ共に、受動的意味での誘惑と考えられる。上記Thayer の(b)名詞としての「試し」は、態 (Voice)を中立と解すれば、受動として「試されること」にも通じる。節操等を試されることは、誘惑を言外に伴う。両者は密接な関係にあって、英訳者がどちらに焦点を置くかによって生じる訳語の異同といえる。

OE の costnung は、Bothworth, J. & Toller,T.N.: *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford 1954) で、'temptation, trying, trial, tribulation' の意味とされている。因に、*OED*にもこの語の記載があるが、今は既に廃語 (Obs.) となり、初例は本稿と同じく、アングロ・サクソン福音書マタイ6:13からの引用で1000年頃とされる。使用例は1200年で終わっている。Wycはここをtemptacioun とし、Tnd－AV 等へと継承されている。Gnv と Rms のtentation は、同じくラテン語系temptation の 'obsolete form'(*OED*) であり、同一語とみてよい。英訳21種の内、15種がtemptation／ tentation である。test が3種 (Jsm, NEB, REB) あって、hard testing の TEV はその変形と考えてよい。NRSV については上述の通りである。従って、英訳で、「誘惑」と解する版が四分の三を占めていることになる。

ギリシア語原典の受動態による《御名が崇められること》への願いは、

《御名が崇められる世の中が自然展開的に生じること》への祈願とも解釈できる。ここに、《崇める》行為の主体ー客体を止揚した主・客合一の世界が生じること、いわば、自然にそうなるという《自発》志向の認識パターンを読みとることも可能である。

'Tyndale－King James tradition'[15] をできる限り踏まえて、新しく発見された資料に基づく正確さと読み易さに留意した改訂版として刊行されたRSV も、Tnd, Grt, Gnv, Bsp, Rsm, AV, ASV と全く同じ「伝統」を踏まえ、'Hallowed be thy name.' を受け継いでいる。その改訂版NRSV も既述の通り同型であり、この構文は、ギリシア語原典に始まりウルガタ訳、更に、OE, ME, EModE, PEの大部分の聖書の中で続いてきた「伝統」である。

また、新しい訳語を試みて、賛否が大きく別れているNIV も、[16] 随所に古くからの伝統的な語句を踏襲している例として、Lewis（同書 p.309）は、この 'Hallowed be your name.' と、同じく「主の祈り」の中の 'debtors', 'debts' を挙げている。

debts に関してみると、英訳の年代順では、 Wyc でdettis として最初に用いられ、 Grt, Gnv, Bsp, Rms, AV, ASV, RSV へと継承されている。Tnd はtrespacers である。ギリシア語原典ではopheilēmata（＜opheilēma の中性、複数、対格）が使用されている。Thayerによると、字義通りには 'debt' であり、比喩的に 'offence, sin' の意味になる。従って、Wycは字義通りの訳を施し、Tndは比喩的意味を踏まえていることになる。他方、マタイと平行するルカ（11:4）のギリシア語ではhamartias となっていて、文字通りの'sins' であり、文脈上、明快、直截な表現となっているのは、実際の宣教の場での利便性、ないし、より効果的な説得力を考慮しての表現かも知れない。

AVはTndに負う点が大きいと屡々いわれる。実際、Partridge は Butterworth の統計を借りて、WycからAV前までの聖書に負うAV語句の百分率を挙げて、TndとGnvが、約三分の一ずつを占めている点に触れている。[17] 'Tnd－AV tradition'といわれる根拠は容易に見出される。しかし、「主の祈り」についてみると、Tndよりも寧ろ、それより古いWycに負う点を等閑に付すことができないことは既述の通りである。上記のdebtsもその一例であるが、（AV）Thy kingdom come. は、（Tnd）Let thy kyngdome come. よりも、（Wyc）thi kyngdom come to. の接続法動詞をそのまま踏ま

えていることは明らかである。

PEにおいても色々な訳文が試みられているが、その序文で、archaism を避けて今日の英語を標榜するNEBは、確かに平易な英語表現になった面があるが、AV の伝統的表現から抜け出していない面もあるとして、Our Father in heaven,／ thy name be hallowed. が時々、例示される。[18] このNEB の改訂版REB では, may を付して、'may your name be hallowed' となっているが、これはまた、自由訳として賛否両論が現在もなお聞かれるTEV、同じく自由訳に近いJsmも、[19] 共に、REB と同じ構文である。

上の構文はいずれも、(1) hallowed be your name (NRSV)型となるか、(2) 主語を文頭におく thy name be hallowed (NEB)、および、接続法の弁別的特徴の衰退と共にその補完的機能をもつ助動詞mayを前置したREB型となるかの差はあっても、本質的には同一の受動態構文が、ギリシア語原典から、ウルガタ訳、更に、OE, ME, EModE, PEの英訳の中に主流として継承されている。しかし、後述の通り、この受動態に代わって能動態の英訳がある。

英訳のhallowed については、OEからPEまでの21種の英語聖書の内、15種が使用し、他の 6 種の中で、be honored (2), be held holy／ in reverence (各1)、be sanctified (1)であり、いずれも受動態をなし、前記15種と共通する。残りの 1 種はPEのLBである。因に、*OED*によると、動詞としての OE (ge-)halgian ('to hallow') は、宗教的意味、とりわけ、「神または神の名を崇める」意味での初例は1000年頃にみられる。名詞として「聖人」(OE halʒa) の意味での初例は 9 世紀末に既にみられるが、1500年以降は殆ど用いられず、ただ、All-Hallows とその複合語に、今日その名残をとどめている。

他の20種の英語聖書と異なるLB では、We honor your holy name.として、主体・客体峻別の表現となる。ここでは、行為の主体 [＝私達] を主題として明示し、続いてその行為内容を叙述する構文である。原典のもついわば自発的受動構文と、認識、つまり、意識の様相(modus) の差がある。いわば、情報構造からみて、明らかに差異がある。

聖書の翻訳では、明快さがもろん重要であり、一般的に、平明な語句や構文によって、人々は聖書に馴染むきっかけが与えられることは確かである。しかし、文の情報構造に係わる訳文においては、注意を払う必要がある。元

来、翻訳には、原文の言語構造の再生（reproducing）よりも、意味内容（thought）の伝達を重視する'Dynamic Equivalence Principle'と、一方、これと対照的に言語構造そのものの再生に重きをおく'Formal Correspondence Principle'があることは、よく知られている。[20] 聖書の原典に息づいていることば遣いを可能な限りとどめて、多様な含意の余地を残すのも、翻訳の一つの方法として考慮に値する。

上の能動、受動の差と同様に、「主の祈り」の原典と異なる語句で対応する英訳が、他にもある。例えば、第4の願いについてみる。ウルガタ訳のsupersubstantialemが、Wycではouir other substauncеと逐語訳になっている。ouir（'over'）は、ウルガタ訳superの字訳（transliteration）であり、ここでは相応しくないが、Wycで随所にみられるウルガタ訳の影響の一つである。これは、ギリシア語epiousionの英訳である。ton arton hēmōn ton epiousionで、冠詞tonの反復によって、epiousion［<形容詞 epiousiosの男性、単数、対格］は、artonに対して後置修飾であることが判る。epiousiosは、*Computer Concordance to the Novum Testamentum Graece*（de Gruyter 1985 p.667）によると、マタイとルカの「主の祈り」だけに用いられている語で各々1回だけの使用である。この語の意味については、最も議論の対象となる語の一つである。これは、学問のあるなしとは無関係に一般の人々によっても使用されたことはなく、伝道者達(Evangelists)によって創られた語とされ、Blackは、'today and tomorrow'即ち'day by day'を意味するアラム語の語句を踏まえていると見做している。[21] この語の派生過程から推定して、'bread for sustenance', 'bread of substance', 'bread for the present','bread for the morrow'等の諸説について、RobertsonやThayerその他で詳述されているが、[22] 本稿では詳細を割愛する。ギリシア語原典で7つの願いのうち、その願いの動詞は、第4を除いて、文頭にきているが、ここだけは目的語のTon artonが文頭におかれている。この語順はウルガタ訳とOEにもみられるが、これと対照的に、Wycでは動詞が文頭にきて、Tnd, AV, 更にPEの諸版は、その先蹤を踏むことになった。

Tndはルターのドイツ語訳も参照しつつ、エラスムスのギリシア語新約聖書を直接に英訳したとして知られているが、先人Wycとの間を細部に亙って比較検討し始めると、予想外に両者の間に類似点が見出される。この第4の願いの語順もその一例と考えて差支えあるまい。少し視点をかえれば、ウ

ルガタ訳に準拠したWycも、必ずしもそれに囚われず、独自の構文を用い、その後のTnd－AV等に影響を与えた面もあることは否定できない。

本稿で検討対象とする21種の英語聖書と上記ギリシア語epiousionとの関係について少し付け加えておく。21種の英訳の内、AVでみられるように'daily'とするのは14種であり、Tndをもって嚆矢とする。それより前のOEとWycは既述の通りである。他の5種の内、Rmsが'supersubstantial'としているのは、この聖書が本来、ウルガタ訳に拠るカトリック訳としての成立の経緯を考えれば、掲出のウルガタ訳'supersubstantialem'と軌を一にする理由も首肯できる。TEVの'the food we need'は、Phsの'the bread we need for the day'と同じ型である。Trnの'our bread for the day'は、AVに近い。LBが'Give us our food again today.'としているのは、自由訳としてのLBの特徴のあらわれの一つとみてよい。いずれにせよ、AVがWycに負う点も多いが、全般的にみると、Tnd－AV Traditionが、PEにおいても多くの英訳聖書の基底に存することは確かである。

5　結び

イエスが弟子達に祈りの手本として示した「主の祈り」は、人々に余りにも親しまれてきているので、修正、変更の余地を殆ど与えなかったといえる。マタイとルカにおける「主の祈り」は、それぞれ7つと5つの願いから成り、いずれも第1の願いに収斂すると考えられる。これと関連して、セミティズムの一つである修辞学的技巧のParallelismに言及し、実際のケリュグマ(宣教)におけることばの役割にも触れた。

聖書それ自体の英訳は、今も伝統を踏まえつつ、一方では、メディアとしての現代英語にメッセージを託す技巧が多様に試みられている。原典に忠実な逐語訳か、それとも自由訳かの両極の間で揺れる翻訳者は、必ずしも方針が一貫している訳ではない。これら両極のいわばアンビバレンスを視野に入れながら、各時代毎に、「今のことば遣い」を標榜する手法は、特に、Tnd以降の英語聖書の年代順比較検討の中に見出すことは容易である。

人々に幾度となく唱えられてきた「主の祈り」についてもまた、ことば遣いの「伝統」に対して、一種のアンチテーゼとしての「現今」、この両者の

中で、いかにジンテーゼとして止揚された表現を創りだすか、しかも、聖書考古学の発展に伴う知見は、絶えず原典の文化的背景と言語についての理解を深め、ひいては、聖書翻訳の改訂に資することになった。このような状況の中で、Partridgeは、2種類の聖書がある方がよいと示唆し、一つは学殖を踏まえたもの、他方は一般の人々に分かりやすいことばで書かれたものと述べている。更に、翻訳に肝腎な点は、快い音調と短い文(euphony and shorter sentences) であるとし、特に快音については、既に、古くTndの留意点であったと付け加えている。[23]

上記のPartridge の見解について視点をかえれば、聖書の翻訳はどれが最もよいかではなく、何のためによいのか、ということになる。例えば、キリスト教徒のためか、それ以外の人をも含む一般の人々のためか、研究のためか、子供向けのためか等である。これら全ての目的に一度に叶うことは、到底、不可能である。これらの異なる用途をどのように折衷させて、原典にみられるイエス・キリストのメッセージを、自国語の表現形式に訳出するかに腐心した英訳者達の足跡を、それぞれの英語聖書の行間に読みとることができる。

翻訳に際しては、一般的に、資料言語 (source language) としての原典の言語と、訳文の言語、つまり、目標言語 (target language) との間では、両者の言語・文化の差異によって、特定の意味を表す語の代わりにもっと一般的な意味をもつ語を使用するという手順、あるいは、その逆の手順、即ち、前者にみられる一般化 (generalization)と、その逆の特殊化 (particularization) が、生じやすいことはよく知られている。聖書の英訳についても例外ではない。聖書の文化的、時代的背景と、一方では現代との差異を、言語の構造的異同の枠組の中にどのように織り込むか、特に、そこに託されたメッセージを人々に伝えることを目的として刊行される聖書においては、受け手による内容理解なしには、その機能を果たしたとはいえない。これらの点を考慮に入れると、既述の Dynamic Equivalence Principle の問題に訳者は直面することになる。

その上、特に聖書に関しては、意識の有無は問わず、先人の訳を考慮に入れた翻訳がなされていることは否めない。AVの原型はTnd に負う点が大きいという意味で、Tyndale— AV tradition といわれ、随所にその特徴が見出され、本稿でも既にその一端に触れた。しかし、Wyc がAV 及びそれ以降

の英訳に与えた影響をまた無視できないことについても、既述の通りである。これはとりもなおさず、ウルガタ訳も等閑視できない根拠となる。各英語聖書には、歴史的にみたそれぞれの言語変遷の一時期における特徴が反映されているが、これらを聖書だけにみられる固有の特徴として捉えるのは早計に失する。

聖書考古学の発達と共に、言語もその一部として含む資料についての新しい知見と、一方では、それを伝達するtarget languageとしての英語のたとえ緩慢であっても絶えず進行する構造的変化、これら二つは、絶えず、改訳着手の要因となり、今後も、それは続くに相違ない。いわば、聖書翻訳の改訂版刊行の時が、即ち、再び次の改訂着手の時でもある。これは、種々の英語聖書上梓の経緯をみれば推し量るに難くはない。

【注】

1) Black,M. (1979) *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts* (Clarendon, Oxford) pp.15－16
田川 建三 (1997)『書物としての新約聖書』(勁草書房) pp.211－213
2) 亀井 孝 (他)(編) (1988)『言語学大辞典』第1巻上 (三省堂) pp.487－498
3) Black,M. et al. (1976) *Peake's Commentary on the Bible* (Nelson) p.778
4) Smith,W. (1967) *Smith's Bible Dictionary* (Pyramid Pub. New York) pp.624－625
Evans,I.H. (1981) *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* (Cassell, London) pp.432－433, 1016
5) Buttrick,G.A.(ed.) (1962) *The Interpreter's Dictionary of the Bible* vol.III (Abingdon, New York) p.155
6) Moulton,J.H. (1980) *A Grammar of New Testament Greek* vol.IV (T.& T.Clark, Edinburgh) pp.96－99, 118－119
Morgan,R. & Barton,J. (1988) *Biblical Interpretation* (Oxford Univ. Press) p.209
7) Green,H.B. (1975) *The Gospel according to Matthew* (Oxford U. Press) p.90
cf. Plummer, A. (1982) *An Exegetical Commentary on the Gospel according to St. Matthew* (Baker, Michigan) pp.95－98
Thompson,G.H.P. (1979) *The Gospel according to Luke*

(Oxford U. Press) p.169

8) Robertson,A.T.(1934) *A Grammar of the Greek New Testament in the Light of Historical Research* (Broadman, Nashville) pp.816−818

Robertson,A.T.& Davis,W.H.(1982) *A New Short Grammar of the Greek Testament* (Baker, Michigan) pp.166−167

Moulton,J.H. (1978b) *A Grammar of New Testament Greek* vol.III (T.& T.Clark, Edinburgh) p.58

9) Robertson,A.T.(1934) *op. cit.* pp.332−334, 797−820

Nunn,H.P.V. (1983) *A Short Syntax of New Testament Greek* (Cambridge U.Press) pp.62−65

Moulton,J.H. (1978b) *op. cit.* pp.53−58

10) Robertson,A.T.(1934) *op. cit.* pp.852−855

Robertson,A.T.& Davis,W.H.(1982) *op. cit.* pp.295−299

Moule,C.F.D.(1982) *An Idiom Book of New Testament Greek* (Cambridge U.P.) p.135

11) Robertson,A.T.(1934) *op. cit.* p.851

Metzger,B.M.(1977) *The Early Versions of the New Testament* (Oxford U.P.) pp.249−250

12) Moulton,J.H. (1978a) *A Grammar of New Testament Greek* vol.I (Clark) p.123

13) Robertson,A.T.(1934) *op. cit.* pp.330, 851−854

cf. Blass,F. & Debrunner,A.(trans.R.W.Funk)(1961) *A Greek Grammar of the New Testament and Other Early Christian Literature* (Univ. of Chicago Press) p.173

14) Nunn,H.P.V. (1983) op. cit. pp.82, 84−86

15) Lewis,J.P. (1984) *The English Bible from KJV to NIV* (Baker, Michigan) p.107

cf. Partridge,A.C.(1973) *English Biblical Translation* (Andre Deutsch, London) pp.110−111

16) Barker,L.B.(ed.) (1986) *The NIV: The Making of a Contemporary Translation* (Zondervan, Michigan) pp.32−33, 142−156

Lewis,J.P. (1984) *op. cit.* pp.293−328

17) Partridge,A.C.(1973) *op. cit.* pp.110−111

18) Lewis,J.P. (1984) *op. cit.* pp.129−163

19) Lewis,J.P. (1984) *ibid.* pp.199−214, 261−291

Bruce,F.F.(1979) *History of the Bible in English*

(Lutterworth, London) p.233

20) Lewis,J.P. (1984) *op. cit.* pp.205, 290
21) Black,M. (1979) *op. cit.* pp.203−208
22) Robertson,A.T.(1934) *op. cit.* pp.159−160
Plummer, A. (1982) *op. cit.* p.101
23) Partridge,A.C.(1973) *op. cit.* pp.203, 232